

～日置町の歴史探訪 ②～

古城跡―上城



古城跡「上城」は文獻によると城主は中世鎌倉時代に活躍した人物の外戚にあり、日置の里の重要度が伺える。

別名「絹の城」として伝えられる上城をこれから尋ねることにします。

「上城山城」は佐々木外戚と申候、よつて此辺の地名を上城と相唱申候」(防長風土注進案)となつてゐる。佐々木一族は長門国守護代記によれば、

佐々木四郎左衛門尉高綱(十代)

佐々木太郎判官定綱(十一代)

佐々木左衛門尉広綱(十二代)

と相次いで長門国の守護となつてゐる。しかもこれら三代の守護は、兄弟甥の關係にあたる。十代佐々木高綱は源頼朝の有力な御家人であつて、源平合戦の折、源義経が大軍を率いて京都に攻め入る時宇治川渡りで先陣を切つた勇猛果敢な武将こそ高綱その人である。

文治元年(一一八五年)源頼朝は全国平定(平家残党追討)のため、諸国に守護職を設置しており、高綱が長門へ下国したのは翌年の文治二年であつた。しかし高綱、定綱は近江国の守護にも任ぜられ

たところを見ると源頼朝の一族として要所に派遣されたものと考えられる。特に長門国においては平家一門の終えんの地であると同時に西国の九州地域に対しての要衝である。長門国ではそれ以前は地方豪族が守護地頭(莊園の取締)となつており中央政権の守護としては十代高綱が最初の守護といつてよい。

その一族の外戚つまり女方の親戚の者が城主ということである。そのように中世の鎌倉時代日置の里も重要な位置にあつたと推測される。御国廻行程記によれば「往古、佐々木ノ某居城ノヨシ、深川十樂古城山ノ城主宇都宮某ナル者ト合戦ノ時、錦ノ城ノツクネ山マデ敵寄セ来タリ矢軍ノ節、絹ヲ張り矢ヲ防ギシ故ニ錦ノ城ト唱ヘヨシ」とある。

深川十樂方面から攻めて来た敵に対して矢来(やぐら)の替りに絹の布を張りめぐらして矢を防ぎ、よつて上城を別名「きぬの城」ともいう。

さて、この上城の城跡を解明したいと昭和五十六年山口県教育委員会と地元(日置)の協力により遺構の発掘調査が行われた。上城山は標高一三二メートル頂上の石祠を中心に約百平方メートルに柱穴四十三基が認められ土師(はじき) (日本古来の

器)の破片、灯明皿、永楽通宝等が発見されている。

こうした出土品からみて、上城が中世を通じて長期間にわたり山城として利用されたのではないかと推定された。

また、注進案によれば、「佐々木外戚の縁に依て日置八幡宮宮司高山家の系図に足利家の紋、二引轡を四目結に代」とあり、これは宮司高山家が城主の縁により家紋を改めたことが記されている。

十二代広綱は承々の乱(一二二一年)後に守護職を没収されてゐるが、上城は在地領主として存続してゐたと思われる。

※参考資料

○地下上申

萩本藩が享保年間より約二十五年かけて村庄屋から村絵図を含めて明細帳を提出させた資料である。(今から二七〇年前)

○防長風土注進案

萩本藩では毛利藩政改革のため長州全域(山口県)にわたり天保年間より約十二年かけて基本調査を実施した。それは六十二項目の膨大な資料である。(今から約一五〇年前)

執筆 岡藤 正作